

「魚との知恵比べ」～親子で挑んだ釣り日記～

フリーライター 畑田家住宅活用保存会正会員 日馬恭代（くさま やすよ）

第一章 「魚」を知ったある日の出来事

<「本当の魚の味を知る！」の巻き>

私の生まれ育った家庭は父、母、姉、そして私、犬二匹の平凡な家庭であった。父は二人の娘と雌犬二匹にはめっぽう甘く、大変可愛がってくれたことを覚えている。父の口癖は「嫌なものを無理に食べんでいい！」だった。躰に滅法うるさい母、娘に好き嫌いをさせまいと、完食するまで席を立たせてくれなかった。だから私はいつも父の助け舟を期待していたのだ。

後で知ったことだが、実は父は食べ物の好きと嫌いがはっきりしている人だった。「好き嫌い」というと語弊があるので、あえて「好きと嫌い」と表現するが、とことん好きな食べ物と絶対食べたくない食べ物があったようだ。

後者の絶対食べたくない食べ物とは「魚料理」であった。“魚の生臭さが嫌だ”と父が言うのを聞いて育ったせいか、私も知らず知らずのうちに魚嫌いになっていた。

そんな私が魚の本当の美味しさを知ったのは社会人一年生の時だった。新米の新聞記者として仕事をしていた折、たまたま大阪の中央卸売市場で鮮魚店店主を取材することになった。取材を終えて帰ろうとした私にその鮮魚店店主がこう言った。

「折角ここへ来て新鮮な魚を食べんと帰らせるわけには行かないなあ。ヨシッ！今から市場内の寿司屋でご馳走しよう！」

「えーっ？魚？」

“魚の生臭さが嫌い”…父の口癖が私の耳にこだました。

だが、新米記者の私が折角のご好意を断る勇気もなく、市場で一番人気の寿司店に連れて行ってもらうことになった。

鮮魚店店主が寿司店店主にこう言った。

「まずはアレ出したって！」

「アレって何い？」緊張が走る…。

そしていきなり私を襲った（笑）のは「海老の踊り」だった。

魚初心者の私にとって「生の海老」というだけでもハードルが高いのに、それを生きたまま食せというのだからほぼ拷問に近いような感覚だった。

しかし新聞記者の名にかけて（関係があったかどうかはわからないが、当時の私はそう思った）、私は笑顔を絶やさず「海老」を「生きたまま」丸呑みした。胃袋の中で海老がピチピチ泳いでいる様が脳裏をよぎった。もう意識が朦朧としてきた。そこに追い討ちをかけるように鮮魚店の店主が「大トロいこ！大トロ握ったって！」と続けた。

「えーっ！大トロ？」ギトギトした肉の脂身を想像していた私は、胃袋の中でピチピチ泳ぐ海老たちが脂まみれになる様子を想像し心配したものだった。

今度は丸呑みするには大きい。意を決して半分嚙んでみた。

おやっ？何これ？溶けた…。

うわっ！美味しい。

「魚は生臭い」って誰がゆうたん？その時私は思った。

こうして23年間魚の味を知らなかった私が魚との運命的な出会いをしたのだった。

“運命的”とは後に続く話に備えてこう書かせてもらった。

第二章 魚君！こんにちは！

<「魚釣りで悪戦苦闘」の巻き>

やがて結婚し、二人の息子の母になった私は「虫が怖い」「魚は触れない」などと言っていられなくなった。年に数回行く家族旅行は沖縄や富士山など自然豊かなところばかり。三重県の英虞湾に位置する合歓の郷もよく訪れた。

プライベートビーチにあるマリーナの栈橋から海を覗くと、魚がウジョウジョ泳いでいる。私たちはここで魚釣りデビューを果たした。

栈橋の上から狙いを定めた魚のところに餌をつけた針を垂らす。

バクバクバク～

ザクッ

ヒョイツ

こんな感じでたやすく釣れると思っていた私はここで魚の賢さを思い知る。

「魚との知恵比べやなっ」と口ずさんだものの、魚に知恵で負けるはずはないと高をくくっていた。魚はすばしっこく餌をくわえてスイスイ逃げて行く。「ヨシッ！食いついた！」と思って竿を上げた時には既に時遅し。餌は綺麗に食べられている。

ゴールデンウィークの初夏の日差しで真っ赤に日に焼け、釣果はゼロ。魚釣り初日は私人間チームの完全敗退だった。

翌日、今度はキスがよく釣れるポイントに船で出て、船釣りをすることに。
この日はポコポコ釣れて我々人間チームの勝ち！と優越感に浸っていた。
が、後で聞くと、あらかじめ餌付けされたポイントでキス釣りをするツアーだったとい
う。これは勝って当たり前だ。魚との知恵比べは1勝1敗ならぬ、1敗1引き分け？と
なった。

「掛け算や割り算や難しい漢字も読める人間の頭脳が魚に負けるはずはない！」
そう思って魚釣り3日目に突入。今度はカヌーに乗って魚を釣る作戦だった。
夫と長男が先にスタート。スイスイカヌーを漕いでいき、好きなポイントで釣り始めた。
彼らは釣りに慣れているので、軽快に竿を操っている。
さて、今度は5歳の次男を乗せて私がカヌーを漕ぎ始めた。

「??？」

「ところでカヌーってどうやって漕ぐの？」

こんな初歩的なことすら知らずに出航した私は最悪のシナリオを連想した。

- ①カヌーが転覆して私と次男が海に投げ出される
- ②次男を助けようと足をバタつかせるが、服を着ている為思うように泳げない。
- ③「助けてー！」と叫ぶが誰も気付かない。
- ④さて、私と次男はどうなる？

実際は岸から1メートルも離れないうちに最悪のシナリオが脳裏をよぎり、大慌てで岸
に戻った。ヨットハーバーの栈橋にしがみつき「すみませーん」「助けてえ〜」と何度も
叫んだ。30分間誰にも気付かれず…不安な時間を過ごす。やがてスタッフが気付いて
私と次男は無事救出された。この日は魚との対戦どころではなかった。魚釣りは丘っぱ
りからやるべし！と固く決意したものだ。こうして私は魚釣りデビューを果たした。

第三章 魚の特性を知る・魚の動きの観察と研究

<「ぼくんちに魚がやってきた」の巻き>

凝り性が良いのか悪いのかは別として、探究心が強いところは私の長所だと自負してい
る。魚の行動を研究したくて釣った魚を生きたまま持ち帰り、海水を入れた水槽で飼育
し始めた。兵庫県は須磨の海で釣れた「がしら」が我が家の家族の一員になった。

後に京都大学、京大大学院で海洋生物の研究をすることになった長男、彼は当時「ぼく
んちに魚がきたー！」と大喜びしていた。水槽を囲んで家族みんなが和気あいあいと魚

談義をしたものだ。が、しばらくしてある重要なことに気付いた。

「餌はどうするの？」

子供の素朴な疑問にドキッとした。

あわてて近所のペットショップに行き、「がしら」の飼育方法を尋ねた。

「餌になる小魚が必要だ」と。

「がしら」がバクッと小魚をひとのみする場面を想像してぞっとしたものだが、無邪気な子供は「餌のお魚買おう」とやる気満々。「魚の行動学の研究」と銘打って魚を持ち帰っただけに、もう後には引けない。餌用の小魚を二匹購入して水槽に放した。

小魚は逃げる逃げる。凄いスピードで泳いで逃げ惑う。

「がしら」は隠れ家の岩から顔を少し出し、獲物が近づくのを待っている。

“大きいものが小さいものを食べる”食物連鎖について親子で話をしたものの、海の底で知らず知らずに行われているそれと違い、目の前の小さな水槽で繰り返されている“食物連鎖”はリアリティーが高すぎて恐怖を覚えずにはいられなかった。

逃げ惑う小魚たちを見ていて、さすがに笑えなくなってきた。息子達もドン引きして青ざめている。私は大慌てで小魚を救出し、ペットショップに返却した。「がしら」はその後須磨の海に戻した。こうして魚の行動学の実践学習は断念した。

私たちはその後も懲りずに釣りに出かけた。「好きこそものの上手なれ」だ。回数を重ねるごとに腕を上げていったように思う。

<「今度こそ“魚との知恵比べ”」の巻き>

魚にすっかりハマってしまった長男は釣った魚を氷たっぷりのクーラーボックスで持ち帰った。決して釣り場で息の根を止めない。

“釣り場で裁いて刺身で食べる人“、“鱗をふいて、ワタを出して持ち帰る人“、“皆、色々と工夫している。ワタは海に返せば魚達の餌にもなるし、何より家の台所を汚さないですむ。主婦の観点から言うと、是非こうしたいものなのだが、長男はそれを許してくれない。なぜなら彼は鱗の形状を研究したいという。だから釣り場で鱗をふくことは出来ない。ワタも同様に解剖して何を食べているのかを研究するという。

「なるほど！」

実際自宅で魚を分解したら胃袋から丸呑みの小魚が出てきた。仮死状態の魚が台所の洗い桶に入れた途端スイスイ泳いだこともある。

鮮度の良い刺身を食いたい気持ちを抑え、凝り性の我々親子は釣った魚を研究し、“魚との知恵比べ”に挑んだ。

“魚の知恵”とは、「どうやって漁具から上手く逃げ、捕まらずに餌だけゲットするか」だ。一方、我々“人間の知恵”とは、「その“魚の行動習性”を知ることによってガッツリ釣り上げること」である。こうして魚の習性についてどんどん調べるようになった。

ところで、こんな話をご存知だろうか？

釣り針に一度かかった魚が上手く逃げるケースがある。また、釣り上げたが小さな魚なので針を外して海にふたたび放流することもある。このようにいちど漁具で釣られた経験のある魚はその経験を学習して釣具を避けるようになるという。また群れを作っている魚はこの釣られたときの釣具経験を仲間に伝達するとのデータもあるらしい。そしてこれらの経験魚達は棘のある小魚を捕食しても吐き出すそうだ。釣り針経験の学習能力であるといえよう。

ウム…魚もなかなかやるな…。

第四章 魚についてもっと調べた

<「魚の眼、どこまで見えているの？」の巻き>

魚の眼は“カメラ眼”といい、構造は人間と似ているが、水中で様々な状況に適応することで進化を遂げてきた。そのため、水中においては魚眼にはさすがの人間もかなわない。魚は眼が頭の横に付いていて少し飛び出しているので視野は上下のみならず後方までにも及ぶという。(参考文献1 第3章34頁) また、魚は動くものに関心を示すため高速カメラの如く瞬間的に視覚情報を得ることが出来る。この能力は我々人間の能力を遙かに超えていて、比較にもならないようだ。また濁った水の中でも魚は見えている。紫外線も見える。(参考文献1 第3章52頁) さらに人間には見えない偏光も魚には見える(参考文献1 第3章55頁) という。そして魚は色盲ではない。色が見えていて、魚種によって色の好みもある(参考文献1 第4章64頁) という。このあたりはまだまだ勉強したい所だが、いずれにしても人間の眼は魚眼には到底かなわないようだ。

<「魚の耳は地獄耳？」の巻き>

生物学的には否定的な意見も多いそうだが、魚が音感覚を持つことは漁師たちの間では周知の話。水中に潜ると私達の耳には水中の音が聞こえにくい構造だ。が、「魚は内耳で音が聴こえる仕組み」(参考文献1 第5章87頁) だという。魚類の音感覚器は側線器と頭骨内部にある内耳により聴こえるらしく、水中でしっかり音を聴いている。ちなみに魚の内耳は1秒間に数十回から2千回程度(数十Hz~2kHz)の周期的な圧力変動を感じ取れる。これを可聴範囲というが、次々とやってくる波により可聴範囲を超える高周波数の音に対して内耳はセンサーの機能を失うという。だから強い音であって

も高周波音は聴こえないという。(参考文献1 第5章 85頁)

参考までに、他の動物の可聴範囲の上限を紹介しよう。

ヒト → 20 kHz

ネコ → 50 kHz

ネズミ → 80 kHz

犬 → 80 kHz

鳥類 → 10 kHz

キリギリス → 45 kHz

魚類の可聴範囲は低周波数域に偏っている。(参考文献1 第5章 86頁)

第五章 とにかく釣れる方法を考えた

<「生きた餌を使った泳がせ釣りに挑戦！」の巻き>

魚について散々調べ学習したものの、理屈ではなく実践でいくことにした。今度は「泳がせ釣り」に挑戦だ。生き餌を使う「泳がせ釣り」は疑似餌を使うルアーフィッシングとは違って魚に餌であることを見切られないという特長がある。

魚を主食とする魚、いわゆるフィッシュイーターは魚食性が強いため生きて泳いでいる餌にはとにかく食いつきが凄いらしい。そんな話を小耳に挟み、早速挑戦することに。

夕まずめでイワシを大量に釣った。これを生き餌にして朝まずめで太刀魚を狙おうと計画。我々釣り好き親子はワクワクしながらバケツにブクブクを入れてイワシが元気に泳ぐのを見て夜まで時間をつぶしていた。

夜が更けてきた頃、周りの釣り人がそろそろつり始めた。キラキラ輝くものがあちらこちらで宙を舞う。「太刀魚だっ！」ついに「泳がせ釣り」デビューの瞬間がきた。

針先に生きのいいイワシをつけて丘っぱりから海めがけて竿を振る。後は待つだけなのだが、私はここへ来て少し冷静な気持ちを取り戻した。

バケツで泳いでいたイワシにしてみれば、「いやー助かった。また大海を泳げるなんて夢のようや」と思っているに違いない。狭いバケツから開放され海を縦横無尽に泳ぐのは「夢のよう」ではなく「夢」なのだ。釣りが好きだとは言ってもさすがに残酷なように思えてきた。そんなことを考えていたその時、竿がググッと引いた。

「きたあああああ〜！」

とりあえず初の「泳がせ釣り」は大成功！太刀魚がものの3分ほどで釣れた。

その後はヒョイヒョイ釣れてクーラーボックスに入りきれないほどの大漁だった。

「イワシ君、ごめんなさい」

そう思いながらの「泳がせ釣り」だった。

まあ、釣りをする限りは魚に負い目を感じても仕方がないのだが、狩りをする性を持ち合わせている男性と違い、女性的な発想では魚に申し訳なく、裁く時もいつも「ごめんなさい」と言いながらエラを一撃している。骨まで美味しくいただいて、魚に感謝の気持ちを持ちながら…また釣りに出かけている。

「いやあ、それにしても釣りっていいですね」

<あとがき>

釣り好きの親子のよもやま話を書かせていただきました。

自己流に調べた魚の情報については間違えていることもあるかもしれませんが、あくまでも釣り人レベルでの知識だということでご理解いただければ幸いです。

最後までお読みいただきありがとうございました。

参考文献 1 川村軍蔵著「魚との知恵比べ」―魚の感覚と行動の科学―（2訂版）

（社）日本水産学会 監修 平成 17 年 12 月 28 日 2 訂再版発行 成山堂書店